

美濃の国の紀遠助、女の靈に会いて遂に死にたる語¹（今昔物語集卷二
十七第二十一）

今昔物語は、古文の教科書にあるような平安の「かな」文体ではなく、漢文調で記述されていて、漢文学習者はよくお目にかかる文字・読みが多い。仮名遣い・送り仮名は戻すの面倒だから少し現代仮名遣いですまんね。

今は昔、長門の前司、藤原の孝範と言ふ者有りき。それが下総の権の守^{かみ}と言ひし時に、関白殿に候^{まをら}ひし者にて、美濃の国に有る生津の御庄^{みじょう}と言ふ所を預かりて知りけるに、その御庄に紀の遠助^{とやすけ}と言ふ者有りき。

人あまた有りける中に、孝範、この遠助を仕ひ付けて、東三条殿の長宿直^{ながととのい}に召上げたりけるが、その宿直はてにければ、暇取^{いとま}らせて返し遣りければ、美濃へ下りけるに、勢田の橋を渡るに、橋の上に女の裾取りたるが立てりければ、遠助、怪しと見て過ぐる程に、女の言わく、「あれはいづち御わする人ぞ」と。然れば、遠助、馬より下りて、「美濃へ罷^{まか}る人なり」と答ふ。

女、「事付け申^{ことつけ}きむと思ふは、聞き給ひてむや」と言ひければ、遠助、「申し侍りなむ」と答ふ。女、「いとうれしくのたまひたり」と言ひて、懐より小さき箱の、絹を以て裹^{つつみ}たるを引出して、「この箱、方島の郡の唐の郷の段の橋の許に持ておわしたらば、橋の西の詰め^{つめ}に女房おわせむとすらむ。その女房に、これ奉り給へ」と言へば、遠助、けむづかしく思えて、よしなき事請^{こと}をしてけると思へども、女の様^{よう}の気怖しく思えければ、いなびがたくて、箱を受取りて、遠助が言わく、「その橋の許におわすらむ女房をば、誰とか聞ゆる。いづくにおわする人ぞ。若しおわしあわずは、いづくをか尋ね奉るべき。亦、これをば、誰が奉り給ふとか申すべき」と。女の言わく、「只、その橋の許におわしたらば、これを受取りに、その女房出で来なむ。よに違ふ事侍らじ。待ち給ふらむぞ。但し、あなかしこ、ゆめゆめこの箱開けて見たまふな」と、かように言い立てりけるを、この遠助が共なる従者共は、女有りとも見えず。只、我が主は馬より下りてよしなくて立てるを、と見て、怪しび思ひけるに、遠助、箱を受取りつれば、女は返りぬ。

その後、馬に乗て行くに、美濃に下り着きて、この橋の許を忘れて過ぎにければ、この箱を取らせざりければ、家に行き着て思い出だして、「いと不便なりける。この箱を取らせざりける」と思ひて、「今ことさらに持

1 傍線は読解に役立つ重要語。知らなければ、辞書で確認のこと。数字は読解で意識するポイント。（岩波文庫版）

2 そのお方はどちらへいらっしゃる方ですか。

3 申しあげましょう

4 引き受け

ち行きて、尋ねて取らせむ」とて、壺屋だちたる所の、物の上に捧げて置きたりけるを、遠助が妻は嫉妬の心いみじく深かりける者にて、この箱を遠助が置きけるを、妻、さりげ無く見て、「この箱をば、女に取らせむとて、京よりわざと買ひ持て来て、我に隠して置きたるなめり」と心得て、遠助が出たる間に、妻密かに箱を取り下して開けて見ければ、人の目をくじりてあまた入れたり。亦、男のまらを毛少し付けつつ、多く切り入れたり。

5 人の眼を抉り取つて
6 男の陰茎を陰毛を少しつけて

妻、これを見てあさましく怖しく成りて、遠助が返り来たるに、まどひ呼寄せて見すれば、遠助、「あはれ、見るまじと言てし物を。不便なるわざかな」と言て、まどひ覆ひて本の様結びて、やがて即ち、かの女の教へし橋の許に持行き立てりければ、実に女房出来たり。遠助、この箱を渡して、女の言いし事を語れば、女房、箱を受取りて言く、「この箱は、開けて見られにけり」と。遠助、「更にさる事候はず」と言へども、女の気色いと悪し氣にて、「いと悪しくし給ふかな」と言ひて、いみじく怒りて、気色悪しながら箱をば受取りつれば、遠助は家に返りぬ。その後、遠助、「心地れいならず」と言て臥しぬ。妻に言く、「さばかり開くまじと言し箱を、よしなく開けて見て」とて、程無く死にけり。されば、人の妻の、嫉妬の心の深くそら疑ひせむは、夫の為にかくよからぬ事の有るなり。嫉妬の故に、遠助、思い懸けず非分に命をなむ失ひてけり。女の常の習とは言ひながら、これを聞く人、皆この妻をにくみけりとなむ語り伝へたるや。

問1 A、B、Cの「由無し（よしなし）」の意味を記せ。

7 今昔物語では教訓が最後に置かれる。嫉妬深い女のせいにしてるが、そういう問題じゃないだろ。ただ、箱の中のものと嫉妬とは暗示的な関係がありそうには思える。